

# 化学療法中の乳がん患者へのメイクアップ指導による QOL 向上の検討

九州大学大学院消化器・総合外科

茂地 智子

Breast cancer survivors have been increasing in Japan due to development of screening, diagnostic, and therapeutic technology. It is important to manage the appearance-related side effects on breast cancer patients because it can affect their self-esteem and quality of life (QOL). The aim of this study is to assess the impact of cosmetic care on QOL in breast cancer patients during chemotherapy.

## 1. 緒言

がん医療の進歩によるがん生存率の向上に伴い、本邦においても、がん治療を継続しながら社会生活を営むがん患者は増加している。厚生労働省の2020年の報告によると、就労を継続しながら通院するがん患者は44.8万人で増加傾向にあり、その1/3以上は女性が占めている。本邦の女性が罹患するがんの中で、最も罹患率が高い乳がんは、年々増加の傾向にある。また、学校生活、就職、結婚、妊娠、子育てなどの様々なライフイベントの移行期を経験する思春期・若年成人(adolescent and young adult; AYA)世代(一般的には15～39歳)の後半(30～39歳)のがん患者では、乳がんの割合が22%と最も高い。よって、乳がん患者の治療を選択・遂行するうえで、QOL(Quality of Life)の維持や向上は軽視されるべきではない問題といえる。

がん治療は、効果が期待される一方で、その副作用により皮膚への色素沈着や脱毛などの外見の変化を生じさせ、患者のQOL低下の大きな要因となり<sup>1)</sup>、治療継続の意欲低下にも影響する可能性がある。Nozawaらの報告では、がん治療の副作用による身体的苦痛のうち、外見の変化に関連した苦痛の割合が高いことが示された。そして、その91%が、仕事中は外見を従来通りに装うことは重要だと回答し、98%が外見の情報を病院で提供してほしいと回答した<sup>2)</sup>。このように、がん治療の副作用による外見の変化に対するケアや支援への患者のニーズは高いのにも関わらず、その予防や対処について科学的に検証された報告は僅少で、エビデンスの蓄積が急がれる課題であると考えられる。

本研究では、抗がん剤治療を受ける乳がん患者へのアピアランスケアの一つとしてのメイクアップ指導が、患者

のQOLに与える効果について検証することを目的とする。そして、将来的には、エビデンスに基づいたアピアランスケアの情報や方法を医療従事者及び患者の間で共有し、がん治療の一環としてがん患者のニーズに対応したシステムの構築を目指した。

## 2. 方法

### 2.1. 対象

被験者をメイクアップ指導介入群12名、対照群12名に分ける並行群間比較試験をデザインした。被験者の適格基準は、当院乳腺外科で化学療法を受ける20歳以上60歳未満の女性乳がん患者で文書による同意が得られた者とし、化粧品に対するアレルギー症状の体質を有するなど試験担当医師が不適当と判断した患者は除外することにした。また、被験者の情報は、匿名化され新たに症例番号を付して情報の保存・管理を行うこととした。割付因子はメイクアップ指導の希望の有無とし、患者の意思を優先とすることにした。

### 2.2. メイクアップ指導

メイクアップ指導は、あらかじめ美容専門家からレクチャーを受けた医療スタッフ(医師、看護師、薬剤師)が連携して、コーサーにより作成されたメイク指導用のテキストや動画を用いて化学療法開始前に行うこととし、指導内容は皮膚の色素沈着のカバー方法や脱落した眉毛の書き方、つけまつげのつけ方などである。使用するメイク用品はコーサーで販売している化粧品を患者に無償提供することとし、皮膚の異常が生じた場合には使用を中止することとした。

### 2.3. QOLの測定

QOLの測定は、がん患者を対象とした尺度であるEuropean Organization for Research and Treatment of Cancer Core Quality of Life Questionnaire(EORTC QLQ-C30)日本語版及び乳がん患者用サブモジュールであるEORTC QLQ-BR23日本語版と、自尊感情を測定す

Impact of cosmetic care on quality of life in breast cancer patients during chemotherapy

Tomoko Shigechi

Department of Surgery and Science, Gradual School of Medical Sciences, Kyushu University

|                  | 治療前 | 治療3週間後 | 治療9週間後 | 治療15週間後 | 治療27週間後 |
|------------------|-----|--------|--------|---------|---------|
| <b>介入群</b>       |     |        |        |         |         |
| メイクアップ指導         | ○   |        |        |         |         |
| EORTC QLQ-C30    | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |
| EORTC QLQ-BR23   | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |
| Rosenberg 自尊感情尺度 | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |
| 自由回答欄を設けた質問票     | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |
| <b>非介入群</b>      |     |        |        |         |         |
| EORTC QLQ-C30    | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |
| EORTC QLQ-BR23   | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |
| Rosenberg 自尊感情尺度 | ○   | ○      | ○      | ○       | ○       |

る尺度である Rosenberg 自尊感情尺度 日本語版の自己記入式質問票を用いて行う。質問票の記入は上の表の通り、治療前と治療 3 週間後、9 週間後、15 週間後、27 週間後の計 5 回依頼する。メイクアップ指導介入群には、前記の質問票に加えて、指導を受けたメイクアップ法継続の有無の質問や、メイクアップを実践するうえで困っている点や追加で必要な情報についての自由回答欄を設けた質問票の記入も依頼する。

### 3. 結果

コーセー美容開発部の協力のもと、メイクアップ指導用のテキストや動画の作成は完了し、コスメ用品の選定と購入は完了した。研究説明書・同意書の作成、QOL 評価目的の質問票の作成も完了した。

### 4. 考察

長い間、がん薬物療法による副作用によって生じる外見の変化に対する予防や治療については注視されることがなく、これに関連した報告は国内及び海外においてもごく僅かであった。がん治療の進歩によるがん分子標的薬の登場により、近年になってようやく治療継続中の QOL の維持が期待されるようになってきた。抗 EGFR 抗体薬（パニツムマブ）による皮膚障害への予防法の有用性を検証する目的で実施された臨床試験（STEPP 試験）では、治療開始前日からのスキンケアの予防的効果が示された<sup>3)</sup>。しかし、がん患者のアピアランスケアの領域は、未だにエビデンスが構築できるほどの研究成果がないのが現状である。

乳がんは、他がんに比べて若年で発症し、患者のあらゆるライフイベントとがんの治療時期が重なるため薬物療法による外見の変化が患者の QOL や精神面へ与える影響はより一層大きいと考えられる。メイクアップは日常生活に密接した行為であり、がん患者における支援が強く求められているが、美容領域での専門性が高いため医療従事者間での知識の定着や手技の獲得が難しく患者への情報提供が十分ではない。したがって、本研究では、アピアランスケアの中でもメイクアップ指導という介入に焦点を当てた。疾患や治療などに伴う外見変化に対するメイクアップは、

「メディカルメイクアップ」という呼び名が示す通り、医学と美容学の融合によって成り立つ。すなわち、疾患や治療による患者の個々の症状や予測される変化への医学的知見のうえで、使用する化粧品や医薬部外品などの化粧品の選定やそれらの使用方法の知識、カバーアップの特殊技術など美容領域での専門性が求められる。患者への情報提供や手技取得の指導は医療機関でなされることが求められているため医療従事者がそれらに熟知しておく必要があるが、美容専門家との連携がなければ成し得ないことである。今回の研究も、コーセーの美容開発部の支援があったからこそ具体的に進めることができた。

また、アピアランスケアによる外見の改善が精神面に及ぼす影響、具体的には「がん治療中も従来通りの日常生活ができる」という自己肯定感が患者の治療や社会活動への大きな原動力となると考える。医療機関で医療として患者に提供する情報や技術はエビデンスに基づくことが前提となるが、前述の通り、がん患者へのメイクアップ指導に限らずアピアランスケアに関する研究報告はほとんど見られない。本研究を通じて、乳がん患者にメイクアップ指導という介入によって化学療法を受ける患者の QOL の向上を示すことができれば、がん患者のアピアランスケアの有効性を示唆する一つのエビデンスを提示できると考えられる。

### (引用文献)

- 1) Lacouture, M. and V. Sibaud, Toxic Side Effects of Targeted Therapies and Immunotherapies Affecting the Skin, Oral Mucosa, Hair, and Nails. *Am J Clin Dermatol*, 19 (Suppl 1): p. 31-39, 2018.
- 2) Nozawa, K., et al., Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer Patients. *Psycho-Oncology*, 22 (9): p. 2140-2147, 2013.
- 3) Lacouture ME, et al., Skin toxicity evaluation protocol with panitumumab (STEPP), a phase II, open-label, randomized trial evaluating the impact of a pre-Emptive Skin treatment regimen on skin toxicities and quality of life in patients with metastatic colorectal cancer: *J Clin Oncol*. 28 (8): 1351-1357, 2010.